

令和 6 年 9 月 30 日現在

機関番号：82404
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2019～2023
 課題番号：19K02965
 研究課題名(和文) 思春期年代の自閉スペクトラム障害の包括的支援をめざすグループ・プログラムの開発

 研究課題名(英文) group program for parents and teachers of adolescent ASD

 研究代表者
 金 樹英 (Kim, Soo-Yung)

 国立障害者リハビリテーションセンター(研究所)・病院 第三診療部(研究所併任)・医長

 研究者番号：90401108
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：自閉スペクトラム症(ASD)の思春期年代の子をもつ家族に対し、英国自閉症協会のプログラムTEEN LIFEと、短縮版プログラムを実施した。効果は支援者と子どもの抑うつ度、育児困難さなどを質問紙にて測定した。どちらのプログラムも、親と子の抑うつ度、子に対する親の評価、育児困難感、は改善傾向がみられた。アンケートでは、参加して『非常に良かった』と『良かった』という回答で100%だった。また「自閉症が子に与える影響」「コミュニケーションにおける工夫」「子の不安やその理由」「適した環境やアプローチ」といったテーマについて、いずれも理解が「非常に深まった」と「深まった」という回答で100%だった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

参加者へのアンケートで「ASDについて何も知らないことに気づいた」「自分の意識改革ができた」「同じ悩みを持つ保護者との出会いで救われた」「この内容を知っているかどうかで今後のかかわりが180度違うことになる」「子に対する考え方がすごく変わった。」「『なぜ?』を考えるようになった」「親子ともに生きやすくなった」「家族で改めて話をするきっかけになった」などの記載が多かった。ピアグループ、基本の理解からワークをしながら勉強する、というプログラムの構成自体は、支援者の心理的改善にどちらも役立っていると考えられた。しかし、育児困難度の客観的改善のためには、短縮版では不十分であることも示唆された。

研究成果の概要(英文)：The British Autistic Society's program TEEN LIFE and a shortened version of the program were administered to families with teenagers with autism spectrum disorder (ASD). Effectiveness was measured by questionnaires on the level of depression of the children and parents, and parenting difficulties of the parents. Both programs showed a trend toward improvement in the depression levels of parents and children, parental evaluation of their children, and parenting difficulties. In the questionnaire, 100% of the respondents answered either "very good" or "good" for their participation. In addition, 100% of the respondents answered that their understanding of "the impact of autism on the child," "communication strategies," "child's anxiety and reasons for it," and "suitable environment and approach" were either "very deepened" or "deepened".

研究分野：児童精神医学

キーワード：自閉スペクトラム症 思春期 グループ 支援者 保護者 TEEN LIFE 知的障害 育児困難

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

就学前の自閉スペクトラム症 (ASD) 者を対象とした支援方法の有用性を検証する研究は数多くあるのに対して、学齢期以降となると極端に少なくなる。思春期以降の自閉スペクトラム症児・者を支援するためには、家庭と医療と教育などが連携し、本人を支える包括的支援システムが機能することが重要であるが、現状は、医療と教育の間は「診断書」や「行動観察記録」など書面による連絡・連携が中心で、支援者間の障害理解に大きな差がある場合も多い。

我々は、思春期年代の ASD 者の保護者と支援者が同時に受講できるプログラムとして、英国自閉症協会 (NAS) で開発された TEEN LIFE プログラムに着目した。

2. 研究の目的

(1) TEENLIFE プログラムは、当事者や支援者の間ではその有用性が認められているが、プログラムの有用性を検証した報告はまだない。TEEN LIFE プログラムを国内で実施し効果を検証する。

(2) TEEN LIFE プログラム (TL) の参加者のアンケートを参考に、特に有用であったと思われる要素を抽出し、短期版 (SP) プログラムを作成し、効果を検証する。

3. 研究の方法

(1) TEEN LIFE プログラムの実施

NAS が提供するトレーニングセミナーを受講し、プログラム実施資格を得た。参加者に手渡すテキスト (137 ページ) や、プログラム実施者用のマニュアルの日本語版作成と、プログラム内で視聴する NAS オリジナルのビデオや映像資料の日本語訳を作成した。

思春期年代の自閉症児・者の支援者向けのグループ・プログラムである TEEN LIFE は、1 回 2 時間半のセッションが連続 6 回で 1 クールとなっている。各セッションは、テーマについて簡単なレクチャーとグループワーク、短い動画 2～4 本の視聴、宿題としてテキストの該当箇所を読む、といった構成になっている。

外来通院中の思春期年代の ASD 者の保護者にプログラムを案内し全セッションに参加可能な人を対象とした。プログラムは 2 日程を設定し、後の日程に参加予定の保護者には、コントロール群として待機中に質問紙に回答していただいた。

1 カ月前に事前の説明会、1 セッション 2.5 時間のセッションを毎週、6 回連続で実施し、最終回の 2 か月後にフォローアップミーティングを実施した。

(2) 効果の測定方法

参加者の抑うつ度 (PHQ-9)、ストレス状況対処行動尺度 (CISS)、子どもの強さと困難さ尺度 (SDQ)、育児の困難さ尺度 (QCD) を自記式質問紙により測定し、各参加者のプログラム参加前後の尺度の変化について検討した。また、事前に ASD についての知識のミニテストを行い、終了後はプログラムの感想をアンケートでたずねた。子どもの同意が得られた場合にはプログラムの前後の子ども自身の抑うつ尺度 (PHQ-9) にも回答を得た。

各セッションの開始前に PHQ-9 を各セッションの前、その他の評価バッテリーはプログラムの前と後、フォローアップ時 (FU) に実施した。

(3) 短期版プログラム (SP) の作成と実施

国内の医療・福祉・教育制度、世相に合わせて内容の修正を行うとともに、TL 受講者のアンケートで高評価だったテーマを含む、1 クール 3 セッションの短期版プログラムを作成した。参加者にはテキストではなくパワーポイント資料を配布し、TL で使用した動画は公開されているもの 1 本のみを SP でも利用した。

(4) 国内の先行研究の概観

2010 年以降に発表された、和文の ASD 児・者への介入実践研究を、キーワード検索し、該当した和文文献 4, 171 編を抽出し、さらに条件 ①査読付き実践研究、②2010 年～2021 年発表、③対象は本人、保護者、支援者、④介入方法は個別・グループに従い選択し、最終的に 148 編の論文を対象とした。

4. 研究成果

(1) TEEN LIFE プログラムおよび短期版プログラムの効果検証 (各指標のコントロール群との比較)

TL 参加者は 2 グループで女子 4 名男子 8 名の 12 家族で計 13 名の保護者 (母親 12 名と父親 1 名) で、年齢は 38-54 (平均 47) 歳だった。最終セッションには子の在籍する学校長も参加した。参加者の子どもは年齢 10-15 (平均 13.1) 歳、女兒 4 名男児 8 名、診断は「ASD」に「知的障害」「盲」「不登校」「不安障害」「吃音」などが併存していた。子どもの PHQ-9 は 12 名中、女子 3 名、男子 3 名で事前・事後のタイミングでのデータが得られた。

SP 参加者は 2 グループで女子 5 名男子 4 名の 9 家族の計 12 名の保護者 (母親 9 名、父親 3 名) で、年齢 41-59 (平均 49.5) 歳だった。子どもは年齢 10-16 (平均 12.5) 歳、女兒 5 名男児 4 名、診断は「ASD」に「知的障害」「不登校」「不安障害」「吃音」などが併存していた。

コントロールデータは後半日程で TL に参加予定の対象者 7 名から得ることができた。

各指標の得点とプログラム前後の変化量について、前後のデータが揃っているものだけを対象にして群間で比較を行った。

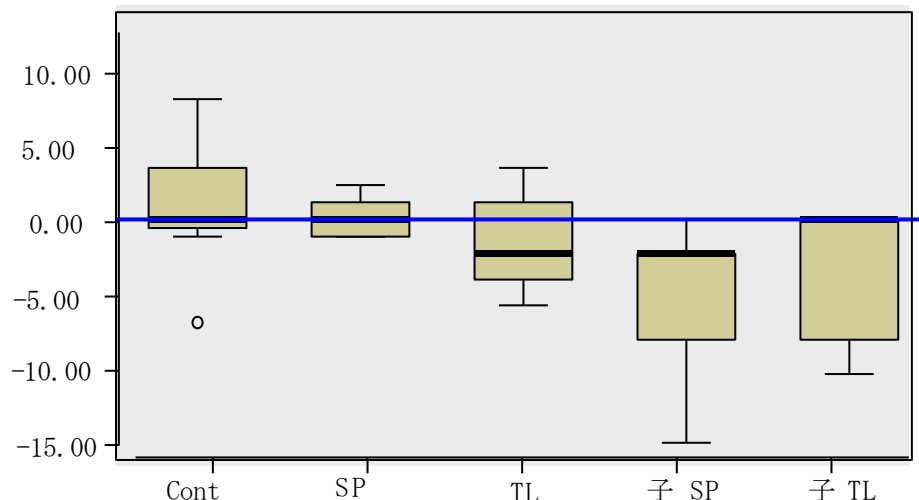
① 抑うつ傾向

PHQ-9の得点は高いほど抑うつ度が強いことを示し、概ね10点以上は中等度の抑うつと判断される。表1に介入前後の統計量とフォローアップ時のデータと変化量を示す。統計的な有意ではないが、コントロール群と比較するとPHQ-9はTL, SPいずれの介入後にも得点の減少傾向がみられた。事前のPHQ-9の平均点は支援者よりも子の方が有意に高く (p=0.007)、介入後の得点変化も支援者よりSPでもTLでも大きい傾向がみられた。

表1 支援者と子どものPHQ-9の平均点と変化量

平均 (SD)	事前 (SD)	事後 (SD)	変化量 (SD)	FU (SD)	FU 変化量 (SD)
TL n=7	7.14 (4.67)	4.86 (2.80)	-2.29 (2.76)	4.90 (5.90)	-0.64 (5.14)
Cont n=7	7.29 (2.91)	7.14 (4.67)	0.143 (3.75)		
SP n=8	5.00 (3.97)	3.75 (2.95)	-1.25 (1.71)	6.18 (5.88)	0.13 (3.98)
TL(子) n=5	13.60 (3.81)	10.00 (3.42)	-4.20 (3.97)		
SP(子) n=6	8.83 (6.74)	3.50 (4.27)	-5.33 (4.42)		

図1 抑うつ尺度 (PHQ-9) の変化



② 支援者のストレス状況対処行動尺度 (CISS)

CISSは48項目からなる自記式質問紙で、対処行動のパターンが「課題優先型」、「情動優先対処」「回避優先対処」の3尺度で評価する。「回避優先対処」には「気分転換優先」「対人的気晴らし優先」の2つの下位尺度があり、結果はT得点としてあらわされる。対象者には共通して「回避優先対処」が低かったが、介入群ではさらに低下がみられた (p=0.014)。

③ 育児困難感 (QCD)

QCDは育児に関して感じる困難感を質問に回答する形で数値化したもので、「朝」「学校」「放課後」「夕方」「夜」「全体」「合計」の項目がある。点数が低いほど、困難感が強いことを示す。3群で得点分布に差はみられなかったが、介入前後の得点変化はTL実施群で「夕方」の得点がコントロール群と比較して有意に変化した (Mann-Whitney, p=0.008, Z=-2.46)。それ以外の項目では合計点も含め群間に有意な差はみられなかった。

表2 QCDの変化量

	朝	学校	放課後	夕方	夜	全体	合計
SP 平均値	.13	-.50	-.25	1.13	.75	.375	1.63
標準偏差	2.85	2.00	2.43	2.03	1.28	1.60	10.38
TL 平均値	1.00	.83	.33	1.75	.75	.83	5.50
標準偏差	3.04	1.64	1.50	2.14	1.91	1.85	8.33
Cont 平均値	.29	-.57	-.43	-.43	-.71	-.29	-2.14
標準偏差	1.49	1.51	1.61	.98	1.89	1.25	4.98

④ 子どもの強さと困難さアンケート (SDQ)

SDQは子どもの情緒や1について25の質問項目により、「情緒の問題」「行為の問題」「多動・不注意」「仲間関係の問題」「向社会的な行動」「総合的困難さ」の5領域について評価する質問紙で、年齢、性別による国内での標準値も報告されている。高得点ほど子どもに困難さがあることを示す。「総合的困難さ」の対象者の平均点は16.7-17.7点で、この年代の臨床域とされる14-

15点を越えていた。

表3 SDQの変化量

変化量	情緒	行為	多動・不注意	仲間関係	向社会的行動	総合的困難さ
SP 平均値	.125	-1.00	-1.63	1.13	.000	-1.38
標準偏差	1.55	2.78	1.06	1.89	1.69	5.60
TL 平均値	-.08	-.231	-.54	-.92	.615	-1.77
標準偏差	1.38	1.74	1.27	1.38	1.71	3.14
Cont 平均値	.43	-.29	-.571	.571	-.29	.143
標準偏差	1.90	1.11	1.13	1.40	1.45	2.61

介入前後の得点変化をみると、TLにおいて「仲間関係の問題」の領域でコントロール群と比較し有意な変化がみられた（Mann-Whitney, $p=0.046$, $Z=-2.03$ ）が、それ以外の領域では3群間で有意な差はみられなかった。

⑤ TL参加者が役に立ったと回答した内容

TL参加者の多くが役に立った内容として、「ストレスと不安」「冰山モデル」「診断や評価」「性の問題」「自立スキル」を挙げた。

(2) プログラム参加者へのアンケート

プログラム後のアンケートでは、TL, SP いずれも「非常によかった」「良かった」の回答を合わせると100%だった。

① ASDの理解

理解についてのアンケートでは「ASDが子どもの与えている影響」「子どもが不安になる理由」「ASDに適した環境や支援方法」についてTL, SPいずれのプログラム後で改善がみられた。一方で、「子どものストレス解消をこころがける」「子どものコミュニケーション方法にこちらが合わせる」については、プログラム前後で変化はみられなかった。

② 開催方法

	肯定的感想	意見・要望
TL	<ul style="list-style-type: none"> 開催回数はちょうどよかった 動画がとてもよかった 	<ul style="list-style-type: none"> 毎週ではなく月2回の方が仕事を休みやすい 内容が盛りだくさんで消化しきれなかった
SP	<ul style="list-style-type: none"> 開催回数が多いと参加のハードルが高くなるので3回はちょうど良い 	<ul style="list-style-type: none"> もっと学びたい 個別でフォローを受けたい 具体的な支援方法などもっと聞きたい 回数も内容も物足りない

③ 共通した感想

<ul style="list-style-type: none"> 同じ悩みをもつ保護者＝ピアの存在に支えられた 一般的な知識に留まらず、わが子のASD症状を理解できた ワークや話し合いにより具体的な理解につながった 子どもの気持ちに寄り添う気持ちが増した

④ 想定外の発見

プログラム実施者でもあり外来担当者でもあるスタッフが愕然としたのは、TL, SPいずれの場合も、長年外来で丁寧に説明して理解もしているだろうと思っていた保護者から多く寄せられた、「初めて自閉症を理解できた」「うちの子はやっぱり自閉症だったんですね」という声だった。

(3) 国内の先行研究の概観

ASDへの支援者による支援についての日本語論文を概観し、資料として専門誌に掲載した（本田、2024）。分析結果、①対象者は「本人」が最多で75.0%、次いで「本人と養育者」（12.2%）、②対象年代は、学童期（35.1%）、乳幼児期（25.7%）が多数を占めていた。③最も活用されている介入法は、行動的アプローチであり、一定の介入効果をあげている一方で、結果が一様でないケースもみられること、などが明らかとなった。今後の課題としては、①青年期・成人期への介入研究の増加、②統制群や待機群を設定した研究の実施、③多面的な評価や中長期的フォローの必要性があげられた。

(4) 考察

TL, SPともに、参加者の満足度は高かった。プログラムのアウトカム測定に用いた指標のうち、コントロール群と比べて、プログラム前後で統計的に有意な差がみられたものはいずれ

も、TLにおいて、CISSでの「回避優先行動」の減少、QCDでの「夕方」の育児困難度の減少、SDQでの「仲間関係の問題」の改善であった。SPにおいては、コントロール群と比較して有意な差はみられなかった。また、ASDのある子ども自身の抑うつ度は保護者と比べ大きかったが、保護者への介入によって大きく軽減されることも示唆された。今回は子どものコントロール群を設定しなかったため、統計的検討はできなかった。

SPではTLで用いた分厚いテキストがなかったこと、6回ではなく3回で厳選した内容を取りあげたこと、教材として利用した動画が1本のみだったこともあり、TLのように「情報を処理しきれない」という感想はなかったが、「物足りない」という感想が目立った。TLは、ASD診断を有するティーンエイジャー（10～16歳）の保護者であることが参加条件で、子どもの知的発達水準やASDの重症度による参加区別がないため、幅広い状態像を有するASD児・者の保護者が一堂に会することになる。そのため、TLの6回の内容を3回にしたSPではその内容が保護者のニーズに必ずしも一致しないことも明らかとなった。必要に応じて、SPの後に、個別、あるいは集団でのブースターセッションを設けたり、参加者の個別特性によって内容を一部低年齢級に変更することが必要と考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 本田由美、河内美恵、金樹英、西牧謙吾	4. 巻 63
2. 論文標題 本邦におけるASD児・者、養育者および支援者に対する介入研究（和文）の外観－2010年以降発表の実践研究を対象として－	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 小児の精神と神経	6. 最初と最後の頁 345-360
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	田島 世貴 (Tajima Seiki) (30420722)	国立障害者リハビリテーションセンター（研究所）・病院 第三診療部（研究所併任）・医長 (82404)	
研究分担者	川淵 竜也 (Kawabuchi Tatsuya) (60614972)	国立障害者リハビリテーションセンター（研究所）・学院 （研究所併任）・教官 (82404)	
研究分担者	西牧 謙吾 (Nishimaki Kengo) (50371711)	国立障害者リハビリテーションセンター（研究所）・病院 （研究所併任）・病院長 (82404)	
研究分担者	河内 美恵 (Kawauchi Mie) (50392460)	国立障害者リハビリテーションセンター（研究所）・自立支 援局（研究所併任）・主任心理判定専門職 (82404)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	倉川 佳世 (Kurakawa Kayo) (70913359)	国立障害者リハビリテーションセンター（研究所）・病院 （研究所併任）・医長 (82404)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	本田 由美 (Honda Yumi)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関